今月の読み物

「見たり、聞いたり、探ったり」No.292

通算 No.443

青　木　行　雄

岐阜、長良川の「鵜飼」

開催期間 5 月11日～10月15日

「鵜飼」は鵜匠が鵜を操って魚を捕まえる伝統漁法である。

「ぎふ長良川鵜飼」の歴史は古く、その始まりは約1300年も前になるという。漆黒の闇の中、煌々と燃える篝火を川面に映して川を下りながら、伝統装束に身を包んだ鵜匠と鵜が一体となって鮎を追う様子は、見る人を幽玄の世界へと誘う。まことにその通りであった。東京木材市場の研修旅行で名古屋から岐阜に行きこの幽玄の世界を実感してきた。何度か行った事はあるが、年と回を重ねるごとに古い伝統の中に受ける感想は変化する思いである。金華山を背景に繰り広げられる伝統漁法の鵜飼、古典絵巻にも例えられる幻想的な美しさ、実感しなければわからない。

岐阜市はこんな表現で「ぎふ長良川の鵜飼」を宣伝している。

信長公や家康公も愛した岐阜おもてなしのクライマックス。

「川の文化」でおもてなし。

岐阜のおもてなしに欠かせないのが、長良川で行われる鵜飼。

信長公自身、鵜飼を厚く保護しており、武田信玄の使者・秋山伯耆守が訪れた折には鵜飼観覧に招待した。さらには獲れた鮎を自ら検分した上で、甲府に届けさせたと伝わる。鵜飼で獲れる長良川の鮎は、柿と並び古代から美濃の特産品であったという。

江戸時代になると名物の鮎鮨が、御鮨街道を通って将軍家に献上されるようになる。これには鵜飼を称賛した徳川家康・秀忠親子も深くかかわっており、家康公に至っては鮎鮨を10回おかわりしたという逸話もあるらしい。かくして鵜飼は時代を通じて守り伝えられ、国内外の文化人にも愛され続けてきた。特に俳人・松尾芭蕉の詠んだ「おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな」は、静寂と闇を染め上げる魅惑的な美と歓楽後のもの悲しい情感を捉えた名句である。

伝統美と遊宴文化が共存した鵜飼観覧は、自然との融合に価値を見出す日本独特の美意識の上に成り立つ特別な伝統文化かも知れない。

金華山と長良川の織り成す景色、鵜匠家に伝わる鵜飼の技と鮎鮨の伝統技術――信長公が愛した耽美と野趣に富む文化は、そのもてなしの心と共に、現在まで受け継がれている。今も変わらず岐阜は、信長公自慢の“おもてなし都市”であり続けるのだ。

こんな文面でしめくくっている。

長良川うかいのりば受付場所。コロナが終えんしつつあり、お客も増えたと言う

うかいのりば。乗船するすぐ上にある。今日の出船は20艘だと言う

観覧船待合所。鵜飼船の説明や観光案内もあり、くわしく案内がある

長良川岸に停泊する観覧船。少々風が強くてゆれていた。何とも風情(ふぜい)があった

船が出て、川岸を写す。これから順番に出船。左側に舞船がいる

観光ホテル前に舞船が近づきました。「長良川艶歌」がかかっています

令和６年５月24日(金)夕方５時過ぎに長良川の鵜飼船停泊所についた。宣伝用ののぼりが風にふかれて、乗船客を待っている。今日の出船は20船だと船頭が言う。１船が20人ぐらいとしても、400人ぐらいの船客である。

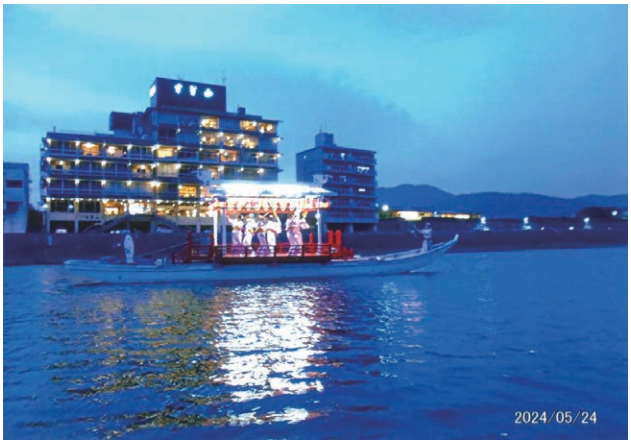
鵜飼が始まる30分前。食事中でした。今か今かと待っています

食事中の風景です。船頭が長々と時間をつぶす為に会話をしています。

５時30分過ぎに受付をすませ、６時30分頃乗船し、６時45分に出船した。20艘の船が次々に出船。我々の船は一番上流に停泊した。先に食事に入った。船頭の説明を長々と聞いた。停泊してから約１時間は長かった。今か今かと待ったが、上流からかがり火が見え始めた時は最初の感動である。だんだん近づいて来る。ホテルの電灯の明りも調整され暗めになった。近づくにつれ仕草がかがり火の明りで鮮明に見えて来た。鵜飼が始まる前、待ち時間を退屈に思うお客のために、若い踊り子を乗せた舞船が２～３回通過した。もちろん舞船から流れる曲は、五木ひろしのヒット曲「長良川艶歌」に美川憲一の「柳ヶ瀬ブルース」が多かったようだ。なる程と思いながら、昔の艶歌が感情をかきたてる。

鵜飼開始７時45分、上流から下る時、開始を合図する花火が上がる。鵜飼が始まる前ぶれである。鵜匠の手縄さばきや、鵜が鮎を獲る姿を見る。約45分、どれ程の距離かわからないが下って、上って、手さばきを披露。参考に写真を見てください。宙吊りの燃える松明(たいまつ)の火を明りに、10本程の糸で鵜をあやつる鵜匠の手さばき、見事と言う外はない。

夕やみがせまって来ました。まもなく鵜飼が始まります。上流から明りが下る。午後７時



だんだん暗くなって来た。午後７時30分。舞船では、大音量の「柳ヶ瀬ブルース」に合わせて踊子が踊っています

６人の鵜匠が別々の舟で６ 艘 、上流から下って来た。毎日順番はクジで決めるらしい

鵜匠が鵜をあやつる姿が見えて来た

鵜匠があやつる鵜、最大12匹。長良川は普通10匹ぐらいだという。よく見ると左側の下に鵜が３匹見える

この情景がなんともすばらしい絶景であった。松の木がバチバチと音をたてて燃える。火花をちらしながら炎上する

フィナーレは鵜舟６艘が川幅いっぱいに広がり鮎を追い込む「総がらみ」は見ていて、文面の中にも記したが幽玄の世界に飛び込んだ幻想の思いを感じる名場面であった。

下船は８時30分頃。余韻を楽しみ芭蕉を思いながら下船し、タクシーにてホテルに帰った。

やはり岐阜に来て、先程「柳ヶ瀬ブルース」を聞いたばかりで、柳ヶ瀬探索は気になる所であった。今の柳ヶ瀬の繁華街は？……、やっぱり探索に出なければと年甲斐も無く行動に……足が動いた。

「柳ヶ瀬繁華街の灯」は消えていた。実感。

もう少々、鵜飼について記して見たい。

鵜匠と鵜の絆、鵜匠の格式

ぎふ長良川鵜飼では、現在６名の鵜匠が活躍している。彼らは、宮内庁の儀式・交際・雅楽に関する職務を行う「式部職」のうち、「鵜匠に任命する」という辞令を受けている。「宮内庁式部職鵜匠」に任命されているのは、全国でぎふ長良川鵜飼の６名と小瀬（おぜ）鵜飼の３名の合計９名のみという。

長良川６件の鵜匠家には、それぞれ屋号があり、鵜匠同士互いを屋号で呼び合うことが多いという。鵜匠は、誰もが就ける職業ではない。鵜匠家に生まれた男性しか就けない「世襲」であり、１家に１人である。病気や死亡などの理由で、先代の父が引退すると、息子がその跡を継ぐことになる。

鵜の特性について

鵜は、カツオドリ目ウ科の水鳥の総称という。ぎふ長良川鵜飼は、カワウよりも体が大きくて丈夫なウミウを使う。現在、茨城県日立市十王町の伊師浜（いしはま）海岸で野生のウミウが捕獲され、各鵜匠家に届けられている。届けられたばかりの鵜を「シントリ」と呼んでいる。

鵜は、人に懐（なつ）き、人が扱いやすい鳥である。また、視力が優れているという。さらに逃げる時、喉にためた魚を吐き出して飛び去る。こうした特徴や習性が、鵜を使うヒントになったという説。鵜が視界に入る魚を可能な限り捕える鵜飼は、他の漁法に比べて魚の捕り逃しが少なく、効率的と言える。また、鵜がくわえると魚が一瞬で死ぬので、脂が逃げず鮮度がいいと言われている。

鵜飼の一日は

朝、鵜匠は鳥屋（とや）に行き、鳥屋籠から鵜を１羽ずつ取り出し、喉や腹に触れて、体調を把握する。鵜が快適に過ごせるよう、鳥屋の掃除も定期的に行う。

夕方、鵜匠は再び鳥屋に行き、その日の漁に連れて行く鵜を選ぶと、鵜籠に入れる。そして、鵜舟に乗り込み、「まわし場」という鵜飼が始まるまでの待機所に向かう。出漁間際に、６艘の鵜舟が出発する順番をくじで決め、その日の鵜飼漁が始まる。

鵜飼漁では、鵜飼観覧船が停止して並ぶ横の川を下りながら漁をする「狩り下り」を行なった。狩り下りを終えると、鵜舟は再び川を上り、６艘が川幅いっぱいに斜めに広がり同方向へゆっくり下りながら漁をする「総がらみ」を行なう。

鵜飼漁を終えると、鵜を鵜籠に戻す。鵜の腹をさすって食べ方の足りない鵜に餌を与えることもある。これを「あがり」と呼ぶ。あがりを終えると、篝火（かがりび）を川に落とし帰宅する。鵜を鳥屋籠に戻して休ませ、

鵜飼の一日が終わる。

鵜の検診

鵜飼シーズンが始まる前と終わった後には、鵜の検診が行われる。獣医師が鵜匠家をまわり、全ての鵜の体重測定と血液検査、予防接種を行なう。

５月11日、鵜飼シーズンが開幕する。鵜飼開きに捕れた初鮎は、皇室に献上したり、明治神宮や橿原神宮、岐阜市内の神社へ奉納する。

鵜飼シーズン中、予定された休日は、中秋の名月の一日のみ。悪天候の場合を除き毎日繰り返し鵜飼が行われる。その間、鮎供養や長良川祭り、八幡祭りなど様々な行事が行われる。

10月15日、鵜飼シーズンが閉幕する。シーズンオフには翌年に備えて、松割木や腰蓑などの道具を準備などすることは多い。

鵜匠は鵜とともに生きる

鵜匠は常に、鵜のことを大切に思って行動する。

「鵜匠にとって鵜の存在は」と聞いて見る。

鵜匠からの言葉。

「家族」「兄弟」「子ども」「孫」「相棒」

共に生活し、一生懸命漁をする毎日を積み重ねていく中で、鵜匠と鵜との間には絆が生まれる。年老いて漁が出来なくなり、鵜飼を引退した鵜も、引き続き鵜匠の家で暮らす。毎年、鵜飼シーズンが終わると、鵜に感謝と弔いの気持ちを示して、亡くなった鵜の供養が行われている。鵜匠の鵜に対する愛情。きっとそれが鵜に伝わるからこそ、鵜は毎日頑張って魚を捕ってくれる。絆で結ばれている鵜匠と鵜が織り成す鵜飼は、見る人々の心を魅了するのであろうか。

鵜匠に飼われる鵜の寿命は、野生の倍で20年前後生き、長い場合30年も長生きする鵜もいるらしい。自然になくなるまで、生涯ここで暮らす。鳥屋（とや）には若く新米の鵜から、現役を退いた年老いた鵜まで一緒になって過ごしている。鵜匠にとって鵜は家族なのだ。

最後に長良川の鵜匠は言う。

「時代の変化で、観光要素が強くなったり、鮎が獲れなくなったり、世の中は変化して来ても根本はやっぱり、魚を獲ることである。」

「昨日より今日、今日より明日、受け継がれてきた伝統と技術を前向きに生かし、努力する事ではなかろうか。」と。

令和６年５月９日　記

参考資料

岐阜市観光マップ

鵜匠パンフより